

---

# 美女と野獣 次女姉の回想

園絵屋その衛門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美女と野獣 次女姉の回想

### 【Nコード】

N1242F

### 【作者名】

園絵屋その衛門

### 【あらすじ】

美女と野獣の物語を、二人の意地悪姉のうち、次女姉の視点で語る。美しい末子である妹は、家族の中でえこひいきされ、二人の姉はそれを疎ましく思っただけで育った。家が破産しても、野獣の屋敷に行っただけから、いつも女王様の妹を妬んだ二人の姉は、ある悪だくみを行う。しかしその結果、妹はますます幸福になり、二人の姉は石像になる罰を受ける。石像になった今、次女姉は冷静に物事を考えられるようになる。

(前書き)

ディズニーの映画『美女と野獣』しかご覧になっていない方には意外な展開だと思えますが、原作のポーモン夫人の「美女と野獣」を下敷きにしています。

母が妹を産んですぐ死んだのは、あたしが二歳のときだった。それで、あたしには母の記憶がない。しかし、母の名を大声で呼び、探し回っていたことは覚えている。それが、あたしの人生で一番古い記憶だった。

家が嫌いだった。

なんでも妹が一番だった。美しさも、賢さも、気立てのよさも。父も三人の兄達も、べたべたと妹を可愛がっていた（妹が溶けずに成長できたのが不思議なくらいだ）。反面、あたし達（姉とあたし）はいつも邪険にされていた。おまえ達は妹に比べ、ブスでバカで性根が腐っている、等々。

年頃になると、年齢の近いあたしと妹は、一緒に社交界デビューした。ここでも、花形が一番美しい妹だったが、妹は家にいるほうが好きだったので、そういう集まりにはあまり出ない。あたしは、一足早くデビューしていた姉に手をとられて、またたく間に社交界の楽しみにはまってしまった。ダンスパーティーに芝居・公園での散歩。嫌な家からの、まさに格好の逃げ場だった。

妹がいなくても、あたし達は人様に関心を示され、お愛想を言われ、親切にされた。家でそんな扱いをされたことなどなかった。あたし達は、たちまち有頂天になった。最初のうちは幸せだった。人が集まってくるのが自分達の器量のおかげだと思っていられ、うちは。だが、そのうち噂話や中傷が耳に入ってきた。彼らの狙いは家の財産だったのだ。友人になろうとする者は、あたし達のふるまう芝居のチケットや食事の支払い、豪華なプレゼントが目当てで、恋人になろうとする男達は家の持参金が目当てなのだ。

周囲の人々は、あたし達が、あたし達のお金をアテにしない身分の人としか付き合わなくなったことを、高慢ちきで貴婦人気取りだ

と悪く言っていた。だが、それでも大金持ちなら商人の娘でさえ表向きは貴婦人のように扱う社交界の矛盾に気づかない。持参金目当てで結婚を申し込む自分たちの卑しさにも目をつむっている。あたし達は、お金目当てでない友人や恋人を希望していただけだが、父だって、兄達だって、あたし達が高慢なだけだと思っていた。誰もあたし達に、きちんと向き合ってまじめな話をしようなんて思っていなかったのだ。

破綻は突然やって来た。

それでも、田舎の別荘は手元に残り、家族全員でそちらに移ることなつた。今までの贅沢な暮らしとは訣別し、残された土地を耕してお百姓の生活をしなければならぬ、と父は涙ながらに語った。破産の原因は父の仕事上の失敗だったから、心労のあまり、父は一気に老け込んでしまった。

姉とあたしの縁談はあっさり全部破綻になったが、妹のは全然減らず、逆に増える様子を見せた。その中には貴族さえもいたのだが、妹は「あたくしはあの哀れなお父さまを見捨てようという気持ちにはどうしてもなれません。それにお父さまといっしょに田舎までついていって、慰めてあげたり、仕事のお手伝いをしたいのです」と言つて断つた。これを聞いて、人々は皆、妹を心のやさしいりっぱな娘だと思つたことだろう。しかし、妹があ縁談の中で一番裕福な男と結婚でもすれば、家を助けることもできたのだ。が、賢い妹は父のために自分を犠牲にするなんてことは思いもつかず、財産のために結婚するという卑しい選択肢は考えすらしない。そして、誰をも納得させ、誰の心をも打つ美しい言い訳を考え出したに過ぎないのだ。

本当のことを言えば、あたしはこの田舎の別荘が好きだった。町の家には決して作れない広い庭園があり、家の裏には森さえあつた。この別荘に来て、姉があたしに用がないときは、あたしは必ず庭園

か森に出ていた。庭園は静かだった。花は美しく咲き、庭木や芝は青々としている。風が渡り、太陽が光を降らせ、雨が恵みを注いだ。森はうるさい兄達の目からあたしをかばってくれた。涼やかな木陰、柔らかな木漏れ日。甘酸っぱい木の実。それから、毒のある植物や虫や蛇、野生の獣など、胸のぞくぞくする危険もあった。森はすべての生き物に対して平等だった。だからこそ安心して入ってあげた。が、暮らしのために庭園は潰され、森も焼かれて畑となった。あたしがどんなに残念に思っていたかなんて誰も知らないだろう。唯一の腹心だった姉でさえも。

妹は朝の四時に起き、家中の掃除をし、家族の食事を作った。糸を紡ぎながら歌を歌い、クラヴサンを弾き、読書をした。こんな暮らしを嘆くこともしない。ここでも見上げたりっぱな娘をやつてのけた。あたし達はそれにイライラした。またもや妹のおかげで、この生活に不平不満を言うあたし達が否定されたのだ。家事全部を預かる妹はこの家の女主人だった。それであたし達は厭味の一つも言いたくなる。だが、妹は黙っているだけ。それでますます妹の株はあがる。あたし達がまたイライラする。悪循環だった。

一年ほど経ったとき、父の商品を積んだ船が幸運にも港に着いたという手紙が届いた。

あたし達は大喜びで、出かける用意をしている父におみやげをねだった。たとえ買えなくても、父はあたし達のはしゃぎぶりが嬉しかったのだ。だから、いい子に黙っている妹にも、「おまえは何か買ってきてくれと言って、わしにおねだりしないのかね？」とたずねたのだ。

「あたくしのことまで考えてくださるなんて、ほんとうにご親切ですね」相変わらず気取った話し方で妹は答えた。「それでしたら、あたくしにバラを一本おみやげに持ってきてください。ここではバラは育たないんですもの」

父は出かけていき、残された兄弟姉妹はいつもの生活をはじめた。父の留守の間、あたし達は同時に恋をした。多分、彼らは父の財

産が戻るとの噂を聞きつけてやってきたのだろう。そんなことは考えもせず、あたし達は父が帰ってきたら、と結婚の約束までした。賢い妹はその間、ずっと奥に引きこもっていた。しかし、妹が表に出ていたからといって、彼らが妹に求婚したとは思えない。彼らが欲しかったのは、すぐに引つかかる愚かな金持ち娘だったのだから。姉の相手は「愛の神」<sup>アムテル</sup>みたいにハンサムな男だった。あたしの相手は才気煥発な男。誰にも後ろ指を指されることのない相手を掴んだことで、あたし達は得意満面だった。今思えば、家を離れる口実ができたので、よく相手を確かめもせずにその腕にしがみついた、ということなのだろうけど。

父が帰ってきた。肩を落とし、顔をゆがめ、そして荷はなかった。商用は失敗だったのだ。それでも、子供全員で父を歓迎し、休ませようとした。父はさめざめと涙を流し、手に持ったバラの枝を妹に渡した。こんなときでさえ妹の望みはかなえられるのだ。

しかし、父の泣くわけは、商用の失敗ではなかった。父の語る悲しい出来事に、あたし達は大きな叫び声をあげた。父は、謎の宮殿でさんざんもてなされたあと、妹の望むバラを手折ったために、宮殿の主である野獣の怒りに触れ、バラと引き換えに命を失わねばならないというのだ。

あたし達は、父にあやまりもせず、涙ひとつ見せない妹にさんざん悪口を言った。

「どうしてあたくしがお父さまの死を嘆き悲しまなければいけないんでしょう？」妹は、いつもの落ち着き払った様子で答えた。「お父さまのいのちはちっとも危険ではありませんわ。だって、その怪物はお父様の娘のだれかひとりが来れば迎えてくれるって言うてるんですもの。相手がどんなに怒っても、あたくしは向こうの言うなりにまかせますわ。お父さまをお救いできて、それにお父さまにあたくしの愛情の証しを見せることができれば、あたくしだってほんとうに嬉しいわ」

父を窮地に追い込んだ原因を作った妹が、身代わりになるのは償いとして当然のことだ。

それを「お父さまをお救いする」だの「愛情の証しをたてる」だの美しい言葉を使うところが妹の賢いところだった。父のために命を捧げようとする決意をした妹は、その潔さと気高さで光り輝いた。

ところで、恐ろしいことを言うわりには気前のいい野獣は、父に大きな箱いっぱいのお金を土産として届けてきた。妹を宮殿において帰ってから泣きつくした父は、あだし達を呼び、そのお金で結婚させると言い出した。妹の口添えがあつたらしい。妹を失った後の父を慰めるのが娘の務めだと思つていたあだし達（結婚は財産が戻らないと知つたときにあきらめていたのだ）は、思いがけないなりゆきに戸惑いながらも喜んだ。父にはあだし達の慰めなどいらないと、妹は判断したのだろう。もしかすると、自分以外の娘が父と親密になることを嫌つたのかもしれない。ファザー・コンプレックスというやつである。だが、そのときは妹のことなど考えなかった。妹ばかりを可愛がり、あだし達には冷たい家族との楽しいお別れなのだ。

結婚は失敗だった。結婚するまではあんなに丁重だった夫は、目的を果たしたので元の姿に戻った。ただただ難しい言葉を並べて自分以外のもの（特にあたし）にケチをつける性悪男。姉の夫は自分の美しさ以外の美を認めず、姉の美しさなど軽蔑しきつていて、妻と顔を合わせることにすらせず、姉は全く放っておかれた。でも、考えてみれば、父や兄達もそうだったから、男なんてものは、何事も自分に都合よく解釈し、それを信じて疑わないものなのかもしれない。

ただ不思議なのが、このどうしようもなく自画自賛な夫二人が親友だということである。おかげであだし達はしょっちゅう会うことができ、夫の愚痴を言い合うことができた。

そんな折、野獣に食べられてしまったとばかり思っていた妹が、

実家に一週間の里帰りに来たという知らせが届き、あたし達は夫を連れて駆けつけた。

妹はまるで女王のように着飾り、しかも前より美しくなっていた。そして、自分がどんなにしあわせな暮らしをしているかを語った。

あんまりだった。あたし達がこの家でどんな思いをしていたか。嫁ぎ先でもいやな思いを抱えてはいるが、でも実家よりはまし、と小さな幸せを噛みしめようとする努力なんて、妹の大きなしあわせの前に木っ端微塵に砕け散った。父の身代わりとなった気高い心を持った妹は、とうとう優雅で安楽な暮らしを手に入れたのだ。真にしあわせそうな妹に、あたし達は怒りを抑えられなかった。妹にどんなに優しくされても、かえってその優しさが、あたし達の心臓を突き刺したのだ。

「ネエおまえ」姉があたしに耳打ちした。「わたしにいいアイデアが浮かんだのよ。あの子を一週間以上ここへとめておくようにしましょうよ。そうすればなにしろ頭の足りない野獣のことだから、あの子が約束を破ったっていつてすぐく腹を立てるでしょ。きつとあの子をバリバリと食べちまうわよ」

頭の足りないのは姉の方だ。妹にベタ惚れの野獣がそんなこと出来るわけがないし、だいたい獣というものは、滅多なことでは人間を食べない。だが、あたしはそういう、自分の感情に正直な姉が好きだった。善悪や常識、理屈、他人の目などは全く気にしない、悪だろつが罪だろつが、姉は自分が感じたとおりに考えを巡らせ、行動するのだ。

あたしは姉の計画に乗った。妹が野獣に食われてしまうと思ったわけではない。あたしは、あの、清廉潔白な妹を罪のしみで汚したかったのだ。自分が約束を破った、自分が悪かった、という後悔をさせたかったのだ。そしてあのエラソーな微笑みを罪悪感で歪ませたかった。たとえそれがどんなにささいな罪でも、あたしは妹を罪人に仕立てたかった。

あたし達は、妹をうんとチャホヤして可愛がった。妹は喜んで涙

ぐむほどだった。それを見て、あたしは人に優しくするのはそう悪くないとも思ったが、結局は下心のある優しさである。わざとらしさに口から何か生えそうな気がしていた。

一週間になった。あたし達は絶望のあまり髪をかきむしり、妹の出発を悲しむふりをした。我ながら女優になればよかったと思うほどの名演技が感動を与え、妹はもう一週間とどまることになった。これであの子はもう破滅よ、と微笑む姉とは違い、あたしは妹がもつとしあわせになるような予感があった。でも、それでもよかったのだ。妹が野獣との約束を破りさえすれば。

妹は十一日目の朝にいなくなった。野獣との約束を破った罪の意識に耐えかねて、あたし達との約束（あと一週間残るといふ）を破って行ってしまったのだ。

あたしの予感は思ったより早く当たった。

その夜十時ごろだろうか。妹を除く家族全員が、いきなり宮殿の広間に立たされた。兵隊に行っていた兄達までも。

驚いているあたし達の前で、あの妹が、姉の夫よりもっと美しい顔の王子と並んでやって来て、えらい仙女に祝福を受けた。この王子が野獣だったのだ。それから妹は、女王様になってもいい気にならないようにと忠告も受けた。そんなことを言われなくても、妹は今ままでいるだろう。今までのような所で女王様だったのだ。それが本当の女王様になったからといって、たかがかしく人数が増えるだけのこと。どうして心変わりなど出来ようか。

「さて、あなたがたお二人ですがね」仙女があたし達に向かつて話し出した。早い話が、あたし達は犯した罪（妹に約束を破らせたことか？）と、意地が悪くてひとを妬む心のために石像になる罰を受けるのだそうだ。そして、妹のしあわせを見続けなければいけない。石像だからまばたきもできないのだ。

「いつか自分達の間違いをさとする日がきたら、二人ともまたもとの姿にかえることができますよ」と、仙女は続けた。「でも、どうやら、生涯、そんな石像のままにいることになりそうだね」（そう言

い放つ彼女が意地悪でないと言えるのだ？)

そして、あたし達は宮殿の入口に石像として立つことになった。雨の日も嵐の日も嵐の日も雪の日も。ま、あたしは自然が好きだからそれでもいいけど、豪華な住まいに美しい衣装、きらびやかな宝飾品を何よりも好んだ姉にとっては、妹の生活を見せ付けられることがどんなにかつらいだろうと同情した。もう、あたし達は意思の疎通はできないから、姉の気持ちは想像するしかないけれど。

妹はしあわせだった。ここで妹を見ていてあたしが出した結論の一つは、やはり妹もあたし達と同じ血をひいているということである。つまり、生まれつきの気質は似たり寄ったりで、性格は後から出来るものなのだ。あたし達と妹に共通してあるのは『私の強さ』だ。妹は、それをよい方向に伸ばし、あたし達は悪い方向に伸ばした。妹が自分の賢さや心がけを磨いているその間、あたし達は家からいかに逃げるかしか考えなかった。あたし自身は、妹のようによい子にはなれなかった。自分の心の不満を抑えてよい子にふるまうことは、どうもうそ臭くてできなかったのだ。

あたしはともかく、姉は優しさを持っていた。幼いころ、母が亡くなったことを理解できないあたしが、大声で母を呼び、屋敷中を歩き回っていたら、兄の一人があたしを怒鳴りつけて(兄があたしに悲しみをぶつけた気持ちは今ではわかる)、驚いたあたしが泣き出したとき、やさしく抱きしめてくれたのは姉だった。実際、あたしを育てたのは姉だといって間違いない。それが、どうして『意地悪』になってしまったのだろうか。姉が、その愛情をあたしにしか向けなかったからだろうか？

いまや悠々自適の身となった父だが、毎朝、散歩と称してあたし達のところにやって来る。父は妹を溺愛していたが、だからといってあたし達を愛していなかったわけではないらしい。父はあたし達を見て、きまつてため息をつく。たぶん、あたし達が人間に戻っていない(そして自分たちの間違いを悟っていない)悲しみのため息なのだろう。父には悪いと思うが、仙女の言うとおり、あたしは人

間に戻れないだろう。自分の中に、妬みや意地悪が起こらないようにするにはどうしたらよいか、全くわからないからだ。もし同じ人生をたどるとしたら、また同じことをしでかすだろう。

もしも、もしも本当にあたしが悟る日が来るとしたら、妹がかなりの年寄りになってからにしたい。あたしは最近そういう想像をして楽しんでる。そして、腰が曲がり薄い白髪と皺くちやでしみだらけの顔をしたおばあちゃんの妹と、昔と同じ若さと美しさのまま人間に戻ったあたしとで、偶然に、二人を映し出す姿見の前に並ぶのだ。

二人の目が相手と自分の姿を同時に見る。そして、あたしは妹に向かつてぼつんと言うのだ。そのときには妬み深い意地悪な心を失っているはずのあたしは、素直な驚きと、妹の心労をねぎらう口ぶりやさしく言うのだ。

「あなたも年をとったわね」

こんなことを考えているうちは、絶対に人間には戻れないだろう。だから、これはあたしのささやかな夢である。

今朝、妹の目尻に笑い皺が出来たのを見た。あたしの夢の日がちよっと近づいてきた。

(後書き)

引用文献

「美女と野獣」ボーモン夫人 / 鈴木豊訳 角川文庫

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1242f/>

---

美女と野獣 次女姉の回想

2010年12月7日20時14分発行